

杜甫の「高枕」について

松 本 肇

はじめに

ボルノウ『人間と空間』によれば、人間は直立の姿勢を取ることによつて、世界と対抗し、横たわることによつて、対抗を放棄するのだという。⁽¹⁾ 対抗を放棄するからこそ、ひとときの安らかな眠りが訪れるのである。安心して眠ることを、「高枕」——枕を高くして眠るといふ。ところが、盛唐の詩人杜甫の詩の中には、明らかに安心して眠れるはずがないにもかかわらず、「高枕」といふことばを用いる例が見られる。以下、杜甫の「高枕」の用法について考察しながら、中唐詩人の先駆者としての杜甫の一面を探つてみたい。

一 高枕の用法

はじめに、辞典によつて高枕の意味を確認しておく。諸

橋轍次著『大漢和辞典』（大修館書店）には、「まくらを高くして安らかにねむる。安心する形容。枕を高くすれば脳中の血が少く、熟睡し易いからいう」とあり、『漢語大詞典』（上海辞書出版社、一九八六）には、「①枕着高枕頭。謂無憂無慮。②猶高臥。謂棄官退隱家居」とある。隠遁する場合も含めて、要するに、心配事がないので、のんびり眠ることを「高枕」といふことが分かるだろう。具体的な用法をいくつか眺めてみよう。

散文における用例から挙げることにする。まず、『韓非子』用人第二十七から引く。

如此、則上無殷夏之患、下無比干之禍。君高枕而臣樂業、道蔽天地、德極万世矣。

此のごとくなれば、則ち上に殷夏の患無く、下に比干の禍無し。君は枕を高くして臣は業を楽しみ、道は天地を蔽い、徳は万世を極む。

賞罰が正しく行なわれれば、どのようになるかについて述べたもので、殷の紂王、夏の桀王のような暴君はいなくなり、紂王を諫めて殺された比干の災難もなくなるといふ。だから、安心して眠れるのである。次は、『戦国策』卷二十二・魏策一から引く。

為大王計、莫如事秦。事秦、則楚韓必不敢動。無楚韓之患、則大王高枕而臥、国必無憂矣。

大王の為に計るに、秦に事するに如くは莫し。秦に事えなば、則ち楚韓必ず敢えて動かざらん。楚韓の患無くんば、則ち大王は枕を高くして臥し、国に必らず憂無からん。

張儀が魏王に説いたことばの一節で、秦に仕えるのが得策であることを述べる。秦に仕えれば、楚や韓から攻撃される心配もなくなり、国家の心配事がなくなるといふ。だから、安心して眠ることができる。次に見るのは、『漢書』卷四十八・賈誼伝の用法である。

梁足以扞趙、淮陽足以禁吳楚、陛下高枕、終亡山東之憂矣。此二世之利也。

梁は以て斉趙を扞ぐに足り、淮陽は以て吳楚を禁ずるに足らば、陛下は枕を高くし、終に山東の憂亡からん。此れ二世の利なり。

賈誼が文帝に対して述べたことばの一節。梁が斉と趙を防ぎ、淮陽が吳と楚を抑えることができれば、山東の心配はなくなるといふ。だから、のんびり眠れるのである。次は、楊雄「解嘲」(『文選』卷四十五)から引く。

故世乱則聖哲馳驚而不足、世治則庸夫高枕而有余。

故に世乱るれば則ち聖哲馳驚するも足らず、世治まれば則ち庸夫枕を高くして余り有り。

乱れた世の中は、聖人や賢者が駆け回つても充分に治められず、平和な世の中は、凡人が寝ていても充分に治められることをいう。枕を高くして眠れるのは、平和な世の中の証明なのである。

右に挙げた四つの例では、国家に心配事がない、つまり平和な状態をいうときに「高枕」ということばが用いられている。これが「高枕」の基本的な用法と見なしてよいだろう。

韻文における用例も挙げておくことにしよう。まず、

『楚辞』に収められた、宋玉「九弁」の一節に、

堯舜皆有所拳任兮 堯舜は皆拳任する所有り

故高枕而自適 故に枕を高くして自適す

とある。宋の洪興祖『楚辞補注』に、「安臥垂拱、万国治也」と述べている。堯舜が賢者を登用したので、のんびり

眠っていても、国がよく治まったことをいう。

六朝時代の南平王劉鐔「過歷山湛長史草堂詩」(遠欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』宋詩卷五、中華書局、一九八三)は、高い山に登った爽快感を詠じる詩。その最後の二句で、

願逐安期生 願わくは安期生を逐い

於焉懷高枕 焉に於て高枕に懷わん

と述べている。安期生は、秦の始皇帝のときの仙人。仙人のあとを追いたいというのは、隱遁への願望を述べたものである。隱遁することができれば、世間の煩わしさから解放されるので、安らかに眠ることができる。

唐詩の例を見ると、王績「贈程処士」(『全唐詩』卷三七)は、儒教道徳にとらわれず、心のままに生きるのがよいと述べる詩で、その最後の二句に、

不如高枕枕 如かず 高枕の枕もて

時取醉消愁 時に酔いを取り愁いを消さんにはとある。酔って憂いを消す、つまり心配事がなくなることと、のんびり眠ることが、等しい意味を与えられている。

張説「深渡駅」(『張説之文集』卷八)は、旅の夜の感慨を記した詩。後に見る杜甫の詩と関係があるので、全体を引用する。

旅宿青山夜 旅宿 青山の夜

荒庭白露秋 荒庭 白露秋なり

洞房懸月影 洞房 月影懸かり

高枕聽江流 高枕 江流を聴く

猿響寒巖樹 猿は響く 寒巖の樹

螢飛古駅樓 螢は飛ぶ 古駅の樓

他鄉對搖落 他鄉 揺落に對し

併覺起離憂 併せて離憂起こるを覺ゆ

秋の夜に山の旅館に泊まり、眠れない夜を過ごしながら、郷里のことを思い出している。「高枕」は、前半の四句だけをとり出せば、のんびり寝ながら川の音を聞いているということなので、特に矛盾は生じない。ところが、後半の四句になると、高枕と安眠という図式が次々に崩れていく。「寒巖」「古駅」「揺落」という悲哀を帯びたことばに連動し、「離憂」という、「高枕」とまったく対立することばで詩を結んでいる。この詩は、「高枕」のイメージを覆すために書かれている、と言っても過言ではない。このような用法が唐詩にあるということを記憶に留めておこう。

王維「与胡居士皆病寄此詩兼示学人二首」其一(趙殿成『王右丞集箋注』卷三)は、胡居士の病氣を例に、仏教の道理を説く詩。その中で、

胡生但高枕 胡生 但だ高枕
寂寞与誰鄰 寂寞 誰と鄰せん

と述べている。胡居士は病氣になつても安心して寝ているという。一見矛盾するような表現だが、仏教徒の胡居士は生老病死に執着しない、つまり病氣を苦にしないから、病氣でも安心して寝ているという意味なので、理屈は通っていることになる。

そのほか、李白「塞下曲六首」其二（『李太白全集』巻五）の最後の二句で、

何当破月氏 何か当に月氏を破り

然後方高枕 然る後に方に枕を高くすべき

と述べている。月氏を打ち破つて、安眠できるようになりたいという。月氏は、西域の国名。外国との戦争に勝つことが、安眠の条件なのである。また、同じく李白「題元丹丘山居」（『李太白全集』巻二五）の最後の二句では、

羨君無紛喧 羨む 君が紛喧無く

高枕碧霞裏 碧霞の裏に高枕するを

と述べている。元丹丘が浮き世の煩わしさに関係なく、のんびり暮らしているのを羨むのである。

右に挙げた七つの例では、張説「深渡駅」を唯一の例外として、賢者の登用、隠遁、自由な生活、仏教の悟り、戦

争での勝利など、いずれも心配事のなくなった状態をいうときに「高枕」ということが用いられている。このような用法は、散文の場合と変わらない。それでは、次に杜甫の詩について見ることにしよう。

二 安らかな眠り

杜甫の詩には、「高枕」の用例が一〇例ある。このうち、安心して眠るのをいう、従来の基本的な用法に収まる例が、四例、そうでない場合が、六例ある。この一〇例について、ひとつひとつ確認していききたい。まず、前者の例を取り上げる。

1 「重過何氏五首」其一（『杜詩詳註』巻三）。天宝十三載（七五四）、四三歳、春の作。

倒衣還命駕 衣を倒にして還た駕を命じ

高枕乃吾廬 枕を高くすれば乃ち吾が廬なり

何將軍の山林に遊んだときの作。この中で、あわてて車に乗って出かけて行き、山荘の中で寝ころぶと、自分の家のように感じると述べている。「倒衣」は、『詩経』齊風「東方未明」に、「東方未明、顛倒衣裳」とあるのに基づく。衣装の上下を逆にする意で、あわてるようす。

2 「太子張舍人遺織成褥段」（『杜詩詳註』巻十三）。広徳二

年(七六四)、五三歳、成都の作。

空堂魑魅走 空堂 魑魅走り

高枕形神清 高枕 形神清し

張舎人が杜甫に毛織りのじゅうたんを贈ったことを詠じる詩。右に引いたのは、張舎人が、このじゅうたんを敷けば、さびしい部屋の化け物も逃げ出し、安心して眠れるので、身も心も清められる、と述べる一節。それに対して、杜甫は、自分にはふさわしくないし、戦乱も続いていることだし、受け取れない、と言って、これを返した。

3 「立秋雨院中有作」(『杜詩詳註』卷十四)。広徳二年(七六四)秋、五三歳、成都の嚴武の幕府で、節度参謀を務めていたときの作。

解衣開北戸 衣を解きて北戸を開き

高枕對南樓 枕を高くして南樓に對す

立秋の雨降りの日に節度使の役所で作った詩。礼服の上着を脱ぎ、役所の部屋でのんびり寝ているのをいう。この詩の中で、嚴武の推薦で節度参謀になったことを感謝し、満足の気持ちを表明している。

4 「夔府書懷四十韻」(『杜詩詳註』卷十六)。大暦元年(七六六)秋、五五歳、夔州の作。

高枕虚眠昼 高枕 虚しく昼に眠る

哀歌欲和誰 哀歌 和せんと欲するものは誰ぞ

夔州での感慨を述べる詩。昼寝をしても安心して寝られず、悲しい歌をうたって、ひとりで嘆くばかりだという。戦乱の世の中にいて、平和の到来を望んでいるのである。この詩では、「高枕」が「虚」と結合して、否定形と同じように用いられているので、安心して眠れないという意味になっているが、「高枕」ということば自体は、のんびり眠るという用法から逸脱していない。

右に挙げた四つの例は、いずれも「高枕」を安らかに眠るという意味で用いて、なんの矛盾も生じない。「高枕」の基本的な用法と言つてよいだろう。その一方で、杜甫の「高枕」には、従来の基本的な用法に収まらない例が見られる。次に、そのような例を取り上げよう。

三 不安を抱えて

杜甫の詩には、明らかに安心して眠れないはずなのに、「高枕」ということばを用いる例が、六例ある。ここでは、この六例について、検討していきたい。

1 「客夜」(『杜詩詳註』卷十一)。宝応元年(七六二)秋、五一歳、綿州から梓州へ行くときの作。このとき、杜甫の家は成都にあったが、徐知道の反乱のために、成都に帰れ

なくなつた。

客睡何曾著

客睡 何ぞ曾て著けん

秋天不肯明

秋天 肯て明らかならず

入簾残月影

簾に入る 残月の影

高枕遠江声

枕を高くす 遠江の声

計拙無衣食

計拙くして衣食無く

途窮仗友生

途窮して友生に仗る

老妻書数紙

老妻 書すること数紙

応悉未帰情

應に未だ帰らざるの情を悉すべし

旅の夜の気持ちを詠じる詩。前半の四句は、旅の夜に眠れない夜を過ごしていること、後半の四句は、世渡りが下手で生活が苦しく、困窮して友人に頼っていることと、妻からの手紙が届いたことを述べている。この詩の第三・四句は、先に挙げた張説「深渡駅」の「洞房懸月影、高枕聴江流」を踏まえているという指摘が、宋の呉曾『能改齋漫録』巻八・沿襲にあり、『杜詩詳註』でもその文章を引いている。「高枕」が、「計拙」「途窮」という悲哀を帯びたことばに連動していく構造は、張説の「深渡駅」とまったく同じである。それにしても、遠くに川の音を聞きながら寝ている、と述べるのに、「高枕」ということばはふさわしくない。その後に、心配事が並べられるのだから。

なお、「高枕遠江声」について、『杜詩詳註』が引く洪仲

の注では、「謂江声高於枕上」、川の音が枕辺よりも高いところで聞こえるのをいう、と解釈している。それに対して、『説杜詩説』巻十一が反論し、「高」という字は実質的な意味のない用法だと述べている。同じような例として、ほかに、二の1、3、および三の2、3を挙げているのだが、それらをひとまとめに論じることとはできない。ただし、換言すれば、「高」という字に実質的な意味はない、という説明を強いて加えなければならないほど、杜甫の「高枕」ということばが、矛盾を含んでいることの証明でもあるだろう。

2 「送舍弟穎赴齊州三首」其一（『杜詩詳註』巻十四）。広徳二年（七六四）秋、五三歳、成都の作。

絶域惟高枕。 絶域 惟だ枕を高くし

清風独杖藜。 清風 独り藜を杖つく

弟が齊州に行くのを見送る詩。都からはるか遠く離れた地方で寝ているのをいう。この詩で杜甫は、別れの悲しみを述べ、戦乱の世で弟とゆつくり会えないのを嘆いている。弟と別れるというのに、また、「絶域」と呼ぶような場所で暮らしているというのに、どうして安らかに眠ることができのだろうか。

3 「返照」(『杜詩詳註』卷十五)。大曆元年(七六六)、五
五歲、夔州西閣の作。

楚王宮北正黃昏

楚王の宮北 正に黃昏

白帝城西過雨痕

白帝城西 過雨の痕

返照入江翻石壁

返照 江に入りて石壁に翻り

帰雲擁樹失山村

帰雲 樹を擁して山村を失う

衰年病肺惟高枕

衰年 肺を病みて惟だ枕を高くし

絕塞愁時早閉門

絶塞 時を愁えて早く門を閉ざす

不可久留豺虎乱

久しく豺虎の乱に留まるべからず

南方実有未招魂

南方 実に未だ招かれざる魂有り

雨上がりの夕暮れの光景に触発されて、自己の感慨を述
べる詩。老衰しぜんそくの病気で寝ながら、辺境の町にい
て戦乱の世を嘆き、盜賊が出る危険な場所には留まりたく
ないが、都にはまだ帰れないと言っている。この詩の「高
枕」も、安らかに眠るという意味に解釈すると、矛盾が生
じる。「衰年」「病肺」「絶塞」「愁時」という悲哀を帯びた
ことばに囲まれているのである。どうして安らかに眠れる
のだろう。この矛盾について、前野直彬注解『唐詩選』
(岩波文庫、一九六二)は、「返照」における「高枕」の解
説で、次のように述べている。

ふつうは安らかに寝ることをいうが、ここでは何もせ

ずに寝てばかりいることを、自嘲をこめて言った。

(巻七)

右の解説は、杜甫の「高枕」の用法が「ふつう」ではな
いことに注目して、「自嘲」という見方を取るのである。
自嘲かどうかの是非はともかくとして、このような解釈が
必要になるほど、「高枕」の用法が特殊であることを示し
ているだろう。

4 「戲作俳諧體遣悶二首」其二(『杜詩詳註』卷二十)。大
曆二年(七六七)、五六歲、夔州の作。

是非何処定 是非 何処に定めん

高枕笑浮生 高枕 浮生を笑う

異郷の風俗の異様なようすを嘆く詩。瓦による占い、焼
畑耕作など、南方に特有の風俗習慣を挙げた後で、この土
地の是非については決められず、寝ながらはかない人生を
笑うばかりだと述べている。異郷の風俗を記し、違和感を
表明するように見せかけて、その是非については、笑いの
うちにまぎらわしてしまふ。この詩を、ユーモアの憂さ晴
らしと題する理由は、そのような落差を楽しんでいるから
である。したがって、この場合、「高枕」ということばは、
一見矛盾するように見えて、ユーモアによる逆転という文
脈の中で、きわめて効果的に用いられていることが分かる

だろう。ほんとうはのんびり寝てられないのに、のんびり寝ていると表現しているからこそ、おかしみが生まれるのである。

5 「太歳日」〔杜詩詳註〕卷二二。大曆三年（七六八）、五七歳、正月三日の作。

散地逾高枕。散地 逾々高枕

生涯脱要津。生涯 要津を脱す

正月の感想を述べる詩。閑散とした土地、つまり夔州で寝ているので、生涯、重要な地位に就くことができないという。この詩の前半では、朝廷のことを思いながら、多病で世渡りの下手なことを嘆いている。安らかに眠る環境にはないのである。

6 「水宿遣興奉呈群公」〔杜詩詳註〕卷二二。大曆三年（七六八）夏、五七歳の作。

高枕翻星月。高枕 星月翻り

敵城疊鼓聲。敵城 鼓聲疊なる

船の上で漂泊の身を嘆きながら、江陵の知人に援助を求める詩。星月夜に寝ていると、城から戦争の太鼓の音が聞こえるという。のんびり寝ている場合ではない。なお、この詩の最後で、「丹心老未折、時訪武陵溪」と述べていることに注意しよう。年老いてもまごころはくじけない、と

いう強い意志の表明である。

右に挙げた六つの例は、ユーモアの表現を除けば、「高枕」を、安らかに眠るという意味で用いると、明らかに矛盾を生じる。そこから、自嘲という解釈も生まれるのだろう。私たちは、高枕＝安眠という先入観を排除して詩を読むことはできない。ところが、杜甫の詩はこのような先入観を裏切っている。では、杜甫の「高枕」を矛盾のないように解釈するには、どうしたらよいだろうか。

杜甫はさまざまな不安を抱えて、本来、のんびり寝てられないような状況にあつても、あえて「高枕」ということばを用いたのではなからうか。矛盾を利用したと言つてもよい。「高枕」ということばの用法を屈折させることこそ、杜甫の作詩上の戦略であつた。杜甫は、張説の「深渡駅」にヒントを得て、「高枕」ということばに、新しい生命を注ぎこんだのである。そして、その根底には、樂觀に基づく自適の思想が存在していたと考えられる。

四 自適の思想

杜甫の「高枕」の特殊な用法がはじめて現われるのは、「客夜」と題する詩で、宝応元年（七六二）秋、五一歳の作品だつた。この同じ年の十一月の作品に、「陪王侍御宴

通泉東山野亭」(『杜詩詳註』卷十二)があり、最後の二句で、次のように述べている。

狂歌遇形勝 狂歌して形勝に遇い

得醉即為家 醉を得れば即ち家と為す

通泉県の東山にある野亭での宴会を詠じる詩。異郷で宴会を楽しみ、景色のよい場所に会って、酔うことができれば、そこは故郷の家と同じだという。異郷にいることも忘れてしまうから、都を思い出す必要もない。「得醉即為家」という表現には、異郷で心の安らぎを見つけようとする積極的な意志がこめられている。もうひとつ例を挙げよう。

「春帰」(『杜詩詳註』卷十三)は、広徳二年(七六四)

春、五三歳、蜀の地を放浪し、成都の草堂に帰ったときの作。その最後の四句で、次のように述べている。

世路雖多梗 世路 梗多しと雖も

吾生亦有涯 吾が生 亦涯有り

此身醒復醉 此の身 醒めて復た酔い

乘興即為家 興に乗ずれば即ち家と為す

世の中に障害は多いけれども、有限の人生なのだから、酒に酔い、楽しい気持ちになることができれば、そこは故郷の家にほかならないという。「乘興即為家」という表現にも、放浪の人生にあつて、心の快適さを求めようとする

積極的な意志がこめられているだろう。心の安らぎを獲得することができれば、障害は障害でなくなる。杜甫は困難な境遇の中で、自適の思想を模索していったと言つてよい。

杜甫には消渴病(糖尿病)があつた。しかし、自分の病気を嘆いてばかりいない。「西閣二首」其二(『杜詩詳註』卷十七)の中では、「消中得自由」、つまり糖尿病があるので自由を得ている、とまで言っている。大暦元年(七六六)、五五歳の作である。このような見方は、苦痛の対象でしかない病気を、視野の転換によって肯定的に把握しようとする白居易の思考に通じる。宋の蘇軾も「病中遊祖塔院」(『蘇軾詩集』卷十、中華書局、一九八二)の中で、「因病得閑殊不惡」、つまり病気でひまができたのも悪くない、と述べている。

杜甫の詩に憂愁を詠じる作品は多い。だが、同時に、悲しむべき境遇にあつても、弱音を吐かず、前向きの姿勢で人生に立ち向かおうとする作品のあることを忘れてはならない。例えば、「昔遊」(『杜詩詳註』卷二十)の最後の四句で、次のように述べている。大暦二年(七六七)、五六歳、夔州の作。

雖悲髮鬢衰 髮鬢の変ずるを悲しむと雖も

未憂筋力弱 未だ筋力の弱きを憂えず

杖藜望清秋 藜を杖ついで清秋を望み

有興入廬霍 興の廬霍に入らんとする有り

白髪を悲しんでも、筋力の弱いことは心配しない。あかざの杖を突いて、さわやかな秋の空を眺めれば、廬山（江西省九江市）と霍山（湖南省衡陽市）に登る気力がわいてくるといふ。ここでは、白髪になったけれども、体力の衰えなど気にしないと、自分を奮い立たせている。

大暦四年（七六九）秋、杜甫が死ぬ一年前の五八歳のとき、湖南で作った「江漢」（『杜詩詳註』巻二三）の中には、次のような句がある。

落日心猶壯 落日 心は猶お壮んに

秋風病欲蘇 秋風 病は蘇らんと欲す

故郷に帰りたいと願いながら、孤独な晩年を過ごしているのに、悲しみにおぼれることなく、精神と肉体を頑強なものに鍛え上げていく³としていく。杜甫にこうした一面のあることを銘記しておくことは重要である。

おわりに

杜甫は、どのような苦境に立たされても、それを乗り越越えることができる⁴と信じる、樂觀的かつ強靱な精神の持ち主だった。それは、心の安らぎを重視する自適の思想を根

底で支えていた。そのようなタイプの詩人として、中唐の白居易を挙げることができる。白居易は、元和十四年（八一九）、忠州で作った「種桃杏」（朱金城『白居易集箋校』巻十八、上海古籍出版社、一九八八）の中で、「無論海角与天涯、大抵心安即是家」と詠じたように、心の安らぎを何よりもたいせつに考える詩人だった。その意味で、杜甫は中唐詩人の先駆的存在なのである。杜甫が、安心して寝てられないような場合にも、あえて「高枕」ということばを用いたのは、悲観的な感情を抑制し、前向きな姿勢で人生に立ち向かう強い意志の現われと考えるとよいだろう。

注

- (1) オットー・フリードリッヒ・ボルノウ著、大塚恵一・池川健司・中村浩平訳『人間と空間』（せりか書房、一九八五）の第三章第五節、5「直立の姿勢」6「横たわること」を参照。
- (2) 埤田重夫「白居易詠病詩の考察——詩人と題材を結ぶもの——」（『中国詩文論叢』第六集、一九八七）を参照。
- (3) 川合康三「悲観と樂觀——抒情の二層——」（『興膳教授退官記念中国文学論集』、汲古書院、二〇〇〇）は、悲哀を乗り越越える意志の力を唱う樂觀の文学に、中国文学の特徴があることを指摘し、そのような例のひとつに、杜甫の「江漢」を引いている。

（筑波大学）